

被災地からのメッセージ

健康増進課 國府田 千春

多くの貴重な命とともに、人々の生活、優美な三陸の自然を根こそぎ奪った東日本大震災。10メートル以上の強靱な防潮堤が、積み木を崩したように転がる風景。どうやって流れ着いたか、想像もつかない場所へのし上がる漁船の数々。山田町の海岸線は下田と良く似ており、この震災が遠くで起きた事のように思えず、被災地での業務を下田市の防災に役立てたいと思い、活動をしました。

静岡県公衆衛生チーム第15班（5月26日～30日）として、岩手県宮古市を拠点に、山田町での避難所巡回や、家庭訪問による健康相談、介護保険や病院受診に関する相談業務を行いました。

普通の生活が営めないスト



深く結ばれた絆

私たち下田市民は、海から憩いの場としてだけでなく、漁業、観光といった様々な恩恵を受けています。しかし災害が起これば、一変し、海は脅威となります。海に面し、急峻な地形の中で生活をしていることをまず理解し、災害時にどのような行動をとらなければならぬのか考えなければなりません。日頃から防災・減災の意識を高く持ち続けることで、考えることと見えてくることもあります。

市の防災担当や市役所だけでは、防災・減災はできません。市民の皆さんの協力を得て、地震や津波、土砂災害等の災害に対応しなければなりません。家庭での食料の備蓄、防災訓練の参加等、まずはできることから積極的に行いましょう。



全てが津波にのまれた

レスは大きく、不眠や体調不良を訴える方々、特に高齢者では震災をきっかけに、外出や体を動かす事が困難な避難所生活が原因で起こる「生活不活発病」のために、立ち座り・歩く等の基本的な動きの機能が低下し、足腰が弱る、寝たきり状態となる状況が起きていました。

いつ起きるか解らない自然災害に立ち向かうには、日頃から家庭や地域における防災の備えとともに、震災後に起き易い心身の機能の低下と闘える体力の備蓄も必要です。普段から足腰を中心とした運動機能を強くする取り組みを、かかりつけ医と相談しながら行いましょう。

『ありがとう。頑張るね。亡くなった人達の分まで一生懸命生きるね。必ず復興するから、また来てね。』

住民の方々力強い心の復興の芽生えを感じた被災地支援業務。東北に美しい復興の花が一日も早く満開になる事を、心より願うとともに頂いた木彫りの「絆」の文字が、いつまでもいつまでも、私の心と東北を強くつないでいてくれます。

冬 萌 え

健康増進課 西谷多香子

当たり前の生活を一瞬にしてのみ込み、人々から笑顔や大切な家族を奪った津波。

静岡県公衆衛生チーム第23班として岩手県山田町に足を踏み入れたのは、震災から3か月後のことでした。

避難所には、移動販売車が行き交い炊き出し用のかまど・冷蔵庫代わりの水貯め・洗濯機などが設置され日常を取り戻しつつある町民の姿がありました。しかし、共同浴場においては排泄物の浮遊など衛生面での問題を抱えていました。

多くの人が、集団生活を送るという事は、さまざまな問題が発生するのです。仕切りもなくダンボールなどで囲まれているだけの居住スペースに、深夜鳴り響く携帯電話の呼び出し音。配給で届くお弁当を、食べられない人々（歯が悪く固い物が食べられない・透析や高血圧症などの病気があり食事制限がある等）。

被災し次から次に発生する問題に立ち向かう山田町の苦勞は、並大抵ではなかったと

被災地派遣

出納室 朝比奈 誠



みな、どうしているだろう

5月下旬に静岡県の派遣隊第10陣として岩手県大槌町で町民課・窓口業務の支援に従事しました。

大槌町は役場自体も津波で全壊し、大槌小学校の校庭に建設されたプレハブの仮設庁舎で業務を行っていました。周囲はまだ瓦礫の撤去の真っ最中であり、小学校の校舎も津波とその後発生した火災のため焼け焦げた状態でした。町長を始め職員の方々もまた被災者であり、自分が配属された町民課でも前任の課長以下数名が行方不明になっているとの事でした。休む間もなく飛び廻っている様子を見てみると、「このままでは職員も倒れてしまうのでは。」と心配にならずにはいられませんでした。また、職員の方の

思います。

もし、いま東海地震がやってきたらどうでしょう。私たちは、自分自身の力で自身自身を守り、立ち直ることができるとしようか。日頃の避難訓練は役立つのでしょうか。

被災地は時間をかけゆつくりではありますが、復興に向かって歩き出しています。一日も早い復興を願うとともに、日頃から防災意識を持つ必要性と今を生き抜く力の大切さを実感した5日間でした。

不便な生活を強いられているにも関わらず、十分な活動ができない私たちに「遠くから来てくれてありがとう」と笑顔で声をかけてくれる町民の優しさが心にしみました。



喜ばれた簡易お風呂

死亡届をご両親が提出にみえた時のいたたまれなさは忘れることができません。

今回、戸籍の処理をお手伝いしました。同じ被災地である近隣の市町からの届出がまとめて届いていましたが、その内容は、それまで自分が見たことも無い悲惨なものばかりで、震災の巨大さ・悲惨さをひしひしと感じました。

そのような状況下で、窓口にくられる住民の方々の冷静な態度には感心させられました。屋外でお待たせしたとしても、不平も漏らさず穏やかに帰って行かれます。ご自分の生活はまだ大変な状況のはずなのに、逆にこちらを気遣う言葉をかけていただき恐縮してしまいました。

東日本大震災から一年が経ちます。「もう」なのか「まだ」なのか。ただ、決して「過去」の出来事ではありません。復興にはまだまだ時間がかかるでしょう。その手助けとして何ができるのか。そして、同様な災害が下田市で起きた場合、その時にどうしたら良いのか。自分たち一人一人が真剣に考えなければならぬと思います。

想 い

建設課 松下 仁



あの頃を、ふと思い出す

私は被災地支援のため7月下旬に岩手県山田町に赴き、建設課職員として働きました。被災者の利益を最優先するという目標のもと、仮設住宅への生活物資の搬入と支援団体との調整を引き受けました。

平時時ならば出来ることでも被災地では困難を極めます。支援団体から提供された生活物資をスムーズに被災者に届けることが出来ずにはいけません。某運送会社ですが、その役目を務めていましたが、対象者の多さから機能不全に陥っていました。生活物資がなければ、食事すら満足に作れません。そのため、避難所に留まる人が相次いでいたのです。

そのような状況下で自らも運送業務にあたりました。生活物資を運び終えると、お礼

災害を意識し、私たちがすべきこと

市民課 渡邊 貴裕

私は、平成23年4月から市民課防災係に配属となり、正直、防災に対してほとんどわからない状態での職務のスタートでした。

災害現場を自分の目で確認したい思いが強かったため、岩手県山田町へ移動日も含め、6月16日から25日まで支援活動に参加しました。活動内容は、山田町災害対策本部へ配属され、災害対策本部の補助や議事録の作成等を行ってききました。議事録を残すことは、大規模災害時にどのような対応をすべきか、他の災害時でも活用できるようにするため必要とされています。

町民の方と接する機会ほとんどありませんでしたが、山田町は今どういう状況なのか、国や県、自衛隊、警察、消防署等との調整、短い期間ではありましたが、課題や対応することの多さに驚くばかりでした。課題は刻一刻と変化し、発災当時に求められたものと、3か月後では変化してしまいました。

と伴に多くの被災者が口にした言葉があります。それは『これでもともな新益ができる・・・』というものでした。想像出来ない程の苦しみの中にありながらも故人を想い続ける姿勢に触れ、私は被災者が直面している覆しがたい苦難を本当の意味で理解したのです。

その後は、自らを律し『被災者の利益』とは何かを見つめなおし、業務にあたりました。そのため支援団体へは平時時では受け入れ難い無理な注文でも行い、結果としては支援団体が生活物資の提供方法を工夫することで状況は改善したと思います。

被災者は人を想うことで苦難に耐え続け、支援者も被災者のことを想い行動し、被災地では皆一つの目標の下に結束していました。しかし、人の力が結束しているにも関わらず、続発する問題が復興を阻み続けます。復興までには長い時間がかかり、我々はその間、震災を過去の出来事にせず、被災者を想う気持ちを保ち続ける必要があります。

震災から一年が過ぎようとしています。これを機に、もう一度震災のことを考えて欲しいと思います。